

## ハリー・ストットルマイヤーの発見：第3章

### 考えるってどんなこと？

リサとジルは、非常階段のいちばん下の段に腰掛けて、いっしょにお昼ご飯を食べていました。二人はいつものように、サンドイッチをはんぶんこしています。ジルのサンドイッチは、いつもと同じツナサンドでした。リサのサンドイッチも、いつもどおりピーナッツバターとジャムが入っていました。

「私がピーナッツバターとジャムをかき混ぜてるのを見てるときのうちお父さんの顔は、一見の価値があるよ。」リサが言いました。「お父さんったら、そんな甘ったるいもののことを考えてるだけで吐き気がしてくるって言うんだよ！」

「わかるわかる。」とジル。「うちのお母さんもいつも言うの。グレープソーダなんて飲む代わりに牛乳を飲みなさいってね。だけど牛乳だよ。オエッ！」

でもリサは、お父さんが言ったことをまだ考えていました。「ピーナッツバターとジャムのことを考えてると吐き気がしてくる？ただ考えてるだけなのに、なんでそんなことができるの？」

「私はね、自分でいろいろ考えてうれしい気分になることがあるよ。」ちょっとしてから、ジルは言いました。「うちで飼ってるサンディーって犬のことを考えているときとかね。サンディーはコリーで、いつもみんなの上に飛び乗るの。お父さんはサンディーのことを「ロミオ」って呼んでるけど、ときどきふざけて「ジュリエット犬」とかって呼ぶときもある。毎日学校から帰ると、私はサンディーを散歩に連れて行くの。サンディーったら、木みたいに見えるものなら何でもおしっこをかけちゃうんだよ！」

「ジルが言いたいことわかった。」リサは話を戻しつつそう言いました。「学校にいるとき、ジルはサンディーのことを考えているのね。で、そうすると、好きなことを考えているときや、サンディーを人形みたいに抱っこしているときのように、暖かくてよい気分なんでしょ。」

ジルはリサがわかってくれて、とてもうれしく思いました。「そうそう！」ジルは叫びました。「その通りよ！サンディーと別れても、サンディーについての「考え」が私と一緒に学校についてくるの。でね、サンディーが飛び跳ねて私のひざを軽くたたくの、私はもうちょっとで感じられるぐらいなのよ。」

リサはキャンディーを見つけたくて、お弁当を入れてきた袋の中をかき回して探していましたが、しゅしゅミントガムで我慢しました。「おもしろくない？」リサはしばらくしてから言いました。「私たち「考える」ってことについて話をしてるんだよ。ほら、うちのクラスのハリーも、私たちはどういうふうに考えるのかってことについていつも話をするじゃない。こないだの授業中もその議論になったのを覚える？」

「私たちはどういうふうに考えるのか、だって？」フランがりサの言ったことを繰り返しました。フランはたったいまやってきて、二人といっしょに座ったのです。

「そうよ。ハリーはいつも考えることについての話をしてる、って言ってるの。」

「えーっと、でもなんで？」ジルが尋ねます。「学校では、ほかのことなら何だって話題になるじゃない。年間降雨量とか、戦争とか、タバコの害についてとか。そうそう、「かんきょーはかい」とかね。」

彼女たちはクスクス笑いました。ジルが国語のホールジー先生のモノマネをしたのがわかったからです。だけどフランは、このことについてもうちょっと話がしたいと思いました。「考える」って言ってるけど、それってどういう意味？心の中にある「考え」のことを言ってるの？ほら、思いつきとか、記憶とか、夢とか、そういうのってあるじゃない。それとも、考えるやり方のことを言ってるの？」

「考えるやり方」って？」ジルが尋ねます。

「ああ、それならわかる。」リサは急いで言いました。「ハリーと私が話をしていたのはそれなのよ。つまり「理解する」ってこと。何かをすでに知ってても、それ以上のことを知りたいと思うなら、考えなくちゃダメでしょ。理解しなくちゃいけないの。」「でも、ただ考えをもっていることと、本当に考えることは違うよ。」フランが言います。「私の心の中は、いつも「考え」であふれかえっているもん。それがどこからやって来るのかはわからないけど。なんとなく思うけど、「考え」ってちょっとソーダの泡に似てない？どこからともなくぷくぷくと沸いてくるでしょ。」

ジルが静かに言います。「私は自分の「考え」がそんなようなものだとは思わない。私にとって「考え」は、暗い洞窟の中で逆さまにぶら下がって眠っているコウモリみたいなものよ。夜になると目を覚まして、洞窟の中をものすごいでっかい音を立てながら飛び回るの。で、私は心の中を駆け回る「考え」のせいで眠れないってわけ。だけど「考え」は、ときどき洞窟から外に出てくることもあって、そのときには鳥に姿を変えるの。鳥ってというか大きなワシミみたいなやつかもしれない。そうすると「考え」は自由に飛び去ってしまって手に負えないの。「考え」は好きなだけ遠くの方に飛んでいくことができるのよ。」

リサはうなずきました。「私の心は、そうね、自分だけの世界って感じかな。私の心は私の部屋みたい。私の部屋の棚にはバービー人形がいくつかあるんだけど、私はこっちの人形で遊ぶときもあれば、あっちの人形で遊ぶときもあるでしょ。「考え」だって同じ。私にはお気に入りの「考え」もあるし、思い出すのさえ嫌な「考え」もあるの。」

「でも、「考え」は本当にあるわけじゃないよ。」ジルが言いました。「つまり、「考え」はリサの部屋にある物みたいに本当にあるわけじゃないってこと。サンディーについての私の「考え」は、本物のサンディーじゃないでしょ。本物のサンディーは身体中が毛でいっぱいだけど、サンディーについての私の「考え」は、ちっとも毛なんて生えていないもん！」

「だけど、それはやっぱり本物の「考え」なんじゃないの。」とフラン。

「ジルが言ってるのはこういう意味？」リサはジルに尋ねます。「心の外に何か物があって、ジルの「考え」はその物に似てるとするじゃない。そうすると、ジルの「考え」は心の外にあるその物の単なるコピーか模造品にすぎないから、本当にあるわけじゃないってことになるよね。ジルが言ってるのってこれで合ってる？だとすると、サンディ

一って名前の犬が心の外にいるときにも、その犬についての私の「考え」は本当にあるわけじゃないってことになるね。だって、私の「考え」は心の外にいる本物のサンディーの単なるコピーにすぎないもん。でもね、心の外にある何かのコピーじゃないような「考え」だってたくさんあるよ！」

「それって、どんなやつ？」ジルが問いただします。

「たとえば、数みたいなのやつ。」リサは得意そうに胸を張って答えました。「数が通りを歩いてたり、どこかそのへんで突っ立ってたりするのをこれまでに見たことある？数が本当に存在する唯一の場所は、心の中なのよ。それに、賭けてもいいけど、心の中だけに本当に存在する数みたいなのやつは、ほかにもたくさんあるよ。」

「そうね。」フランが口を挟んできました。「「感じ」はどうか？悲しさとかうれしさを「感じる」ときってあるけど、そういう「感じ」も心の中にしかないんじゃない？「感じ」が通りを歩いているところだって一度も見たことがないもん！」

リサは答えませんでした。「感じ」についてはよくわからなかったのです。少なくとも、「感じ」はいったいどこにあるのかについて、リサはよくわかりませんでした。だけど、リサにわかっていたことが一つあります。それは、頭をひねって考え出したり頭にパッと思い浮かんだりする「考え」が心の中に満ちあふれているように、心は色や味や音でも満ちあふれていて、私はそれを思い出すことができるんだ、ということでした。そのうちハリーとこの話をしてみよう。リサはそう心に決めました。

三人の女の子たちは、ゆっくりと自分たちの教室に戻りはじめました。フランはスニーカーのひもを結び直すためにしばらく立ち止まっていた。フランが教室に戻ってきたとき、ほとんどのクラスメイトはミリーが連れてきたばかりのハムスターに注目していました。チャイムがまさに鳴るところでしたが、二人の学級委員の男の子がドアのところにまだ立っていました。二人とも大柄でだいぶがっしりとした体格でした。彼らは通せんぼうをしてフランをからかおうとしました。もしかしたら二人は、フランが女の子だからからかってやろうと思ったのかもしれませんが。ですがフランは、自分が黒人の女の子だからからかわれたんだろうときっと思ったのでしょうか。フランはそういうちょっかいが好きではなかったの、二人を押しつけて教室に入ろうとしました。まさにそのとき、ホールジー先生がフランの方を振り向いて、彼女が男の子を押しつけたのを見てしまいました。ホールジー先生はフランをととても厳しくしかりつけました。

フランは何も言わずに黙っていましたが、次の瞬間、誰も予想もしなかったことをやってのけました。教室の前の列の机の上に立ち上がったかと思うと、机から机へとぴょんぴょん飛び回りはじめたのです。その姿は優雅で気品にあふれていました。フランはそのまま教室を一周すると、自分の席に静かに戻りました。

ずっと後になって、といってもその日のうちですが、リサは心の中で奇妙な光景を思い浮かべていました。それは、物音一つしない教室で、フランが机から机へと誇らしげに飛び回っている光景でした。このイメージは、リサがベッドに入って目をつぶっているときにも、彼女の心に非常に鮮明によみがえってきました。しかし少しすると、別のイメージが取って代わりました。そこは学校の廊下でした。ものすごくたくさんの動物

たちが水飲み場のまわりに集まっていました。動物たちは特に何もしていませんでした。水を飲んでいる動物もいましたが、たいていはただそこに座ったり立ったりしているだけでした。リサはすぐに、そこにいるどの動物にもおかしなところがあるのに気がつきました。シマウマには長い爪があります。キリンには長くてふわふわのしっぽが生えています。ゾウにはとても大きなヒゲがあります。スイギュウは床の上に身を伏せて、緑色の目をした野ネズミに飛びかかる準備をしています。チンパンジーはみんな耳がとがっていて、目がつり上がっています。クマは自分の前足をなめて、それで顔を洗い続けています。

なんて奇妙な光景だろう！夢を見ているのかなあとリサは思いました。そしてすぐに、まったく思いがけないことに、リサはハリーといっしょに話をした内容を思い出しました。「猫はみんな動物だ。」リサもハリーもこの文には賛成しました。ですが、この文はひっくり返すことができないのです。つまり、「動物はみんな猫だ」と言うことはできないのです。

「だから、動物がみんな猫だってわけじゃないんだよね。」リサは自問しました。「でも、空想の中でなら、動物がみんな猫だってこともありうるじゃない！夢の中だってそう。私は自分の好きなようにどんなことだって想像することができるんだもん。だから、そのときはハリーが考えた規則は通用しないんだ。」

いまやリサは、頭を悩ませていた問題を解決しました。彼女は満足した気持ちになってちょっぴりほほえむと、眠りに落ちていきました。そしてふたたび、あらゆる動物がみんな猫になっていて、廊下の水飲み場にいる夢を見ました。また、野菜がみんなタマネギになっている農場の夢も見ました。そこでは、キュウリやトマトでさえもタマネギでした。さらに、どんな人でも年齢が十歳であるような世界の夢も見ました。その世界では、赤ちゃんだって大人だって、おじいちゃんやおばあちゃんですえみんな十歳でした。ですが、それでもやっぱり夢を見ているあいだ中、リサにはちゃんとわかっていました。彼女がふたたび目を覚ます世界では、猫はみんな動物だけど、動物がみんな猫だってわけじゃない、ということ。

\* \* \*

さて、トニーはその晩寝付けずにベッドの上で寝返りを打っていました。トニーの自慢は、計算をたいてい子どもたちよりも簡単にやる方法をあみ出したことでした。だけどトニーは国語も好きでした。物語はそんなに好きではないのですが、文法はいちばん好きでした。実のところ、文法が好きな子どもはそんなに多くはいません。ですがトニーはそうだったのです。トニーが好きなのは、文の部分はどのように組み合わせると文になるのかを理解することでした。「文はバラバラに分解できるんだよ。古い目覚まし時計を分解して、目の前の床の上に部品をみんな並べてるときみたいにね。」トニー

は前にティミーにそう言ったことがありました。ティミーはいつも計算や国語の宿題をトニーに見てもらっているのです。

ですがいま、トニーはハリーが発見したことについて考え続けていました。そして、ハリーの発見をお父さんに伝えたときのことを考え続けていました。「パパ。」トニーはさっきまでお父さんと話をしていました。「覚えてる？パパはこないだ僕にこう言ったんだよ。エンジニアはみんな数学がよくできる。だからお前はエンジニアになるべきだってね。」

お父さんは読んでいた新聞を置いて、メガネを外し、タバコの火を灰皿でもみ消してから答えました。「覚えてるよ。それがどうしたの？」

「えーっと。」トニーは言いました。「あのね、パパが言ったのは「エンジニアはみんな数学がよくできる」だよ。いいよね？それで、パパはエンジニアでしょ。だから、このことからどんな結論が出てくるかパパにはわかるよね。「パパは数学がよくできる」って結論が出てくるよね。合ってるでしょ？」

お父さんは同意してうなずきました。そこでトニーは続けました。「でもねパパ。「エンジニアはみんな数学がよくできる」って文からは、僕もエンジニアになるべきだって結論は全然出てこないんだよ。だって、僕がたまたま数学がよくできるだけかもしれないじゃん。」

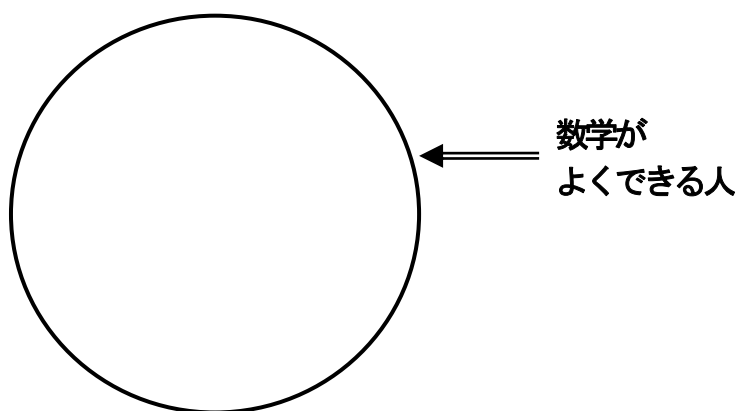
「なんで出てこないの？」お父さんは尋ねました。ふと気がつくと、トニーはハリーがしてくれた説明を忘れてしまっていました。トニーはひどくうろたえました。そして、お父さんが新聞を手にとってふたたび読み始めてしまうのではないかと不安になりました。

すぐに、まったく突然に、トニーはハリーの説明を思い出しました。「それはね。そういう文はひっくり返すことができないからだよ！」トニーは得意そうに言うと、ハリーが話してくれたことをお父さんに説明しはじめました。

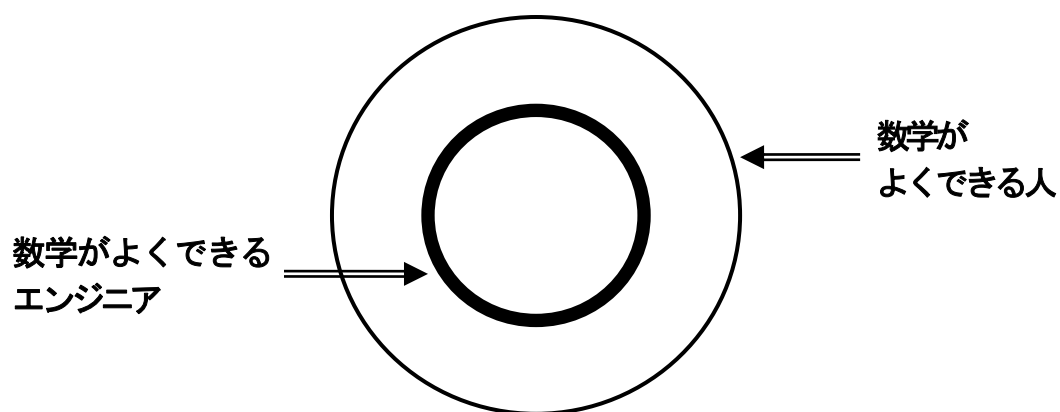
トニーのお父さんは、トニーの話をもとよく聞いた後で、こう言いました。「なるほどねえ。だけど、どんな場合でもものがそうである理由を知りたいというのが、たまたまだけどパパの性格なんだ。だからパパがいま知りたいのは、「…はみんな～だ」という文の「…」と「～」はなんでひっくり返すことができないのか？っていう理由なんだけど。」

トニーは首を横に振って、理由はわからないと認めました。

「いやいや、パパにだってわからないんだ。」トニーのお父さんは言いました。「だけど、パパだってぜひともそのわけを知りたいと思ってるよ。そこで、こうやって考えてみようと思うんだ。」お父さんはポケットから使い古した封筒を取り出して、裏側に図を描き始めました。「大きな円を描いて、その横にこう書いて、と。」



「数学がよくできる人はみんなこの円の中に入ってる、って考えてね。つまりこの円は、巨大な円形のフェンスかオリみたいなものだね。で、この大きな円の中に二番目の円を描く。こうやって。」



「小さいオリの中には、エンジニアだけが閉じこめられているとするね。でも、彼らはみんな数学がよくできる。だって、彼らは大きいオリの中にも閉じこめられているんだからね。ほら見て、トニー、小さいオリは大きいオリの中に収まっているけど、大きいオリが小さいオリの中に収まっていることはないよ。」

トニーはお父さんをじっと見つめました。「パパはこう言ってるの？「…はみんな～

だ」という文の「…」と「～」をひっくり返すことができない理由はそれなんだって。人間のグループでも物のグループでも、小さいグループが大きいグループの中に入っていることはありうるけど、大きいグループが小さいグループの中に入っていることはありえないよね。それが理由なんだってパパは言ってるの？」

「一番大事なポイントはそこだと思うよ。」トニーのお父さんは答えました。

トニーはテーブルを手でぴしゃりと叩きました。「こういうことだね。「ニューヨーク市民はみんなアメリカ人だ」と言ったとしても、それは確かに「アメリカ人はみんなニューヨーク市民だ」っていう意味じゃない。だって、ニューヨークがアメリカの一部だとしても、アメリカは決してニューヨークの一部ではありえないんだから。」

「こうも言える。」トニーのお父さんは言いました。「もし仮に、「エンジニアはみんな数学がよくできる人だ」ということが正しいとしても、そのことから「数学がよくできる人はみんなエンジニアだ」という結論は出てこない。」「ということは、僕は正しかったんだ！」トニーは叫びました。「そうだとお前は正しかった。」トニーのお父さんは、かすかにほほえみを浮かべてそう言いました。「お前は完全に正しかったんだよ。」お父さんはメガネをかけて、タバコに火をつけ、新聞をふたたび手に取りました。